

6年1組

耕作放棄地利活用プロジェクト③ ～使われていない畑で 自給率0%の綿花を育てたい～



☆これ、ストーリー性をもたせてるんだ☆

冬休み前、クラスで畑の片づけについて話し合いをしていた時のことです。私は、引っこ抜く予定の棉花(ここでは綿の収穫を終えた「木」を指す)を新年になったらお焚き上げをするのはどうかと思い、子どもたちに提案しました。しかし、子どもたちにすぐに反対されてしまいました。あちこちから「棉花使って何かできるよ」、「棉花で何か作りたい」という声が聞こえてきたのです。どうやら4年生の時の担任である大畑先生が、りんごの木を使って作ってくれた置物と、棉花がつながったようです。私はその時、子どもたちの声を聞きながら、棉花の可能性について考えたくになりました。



そして冬休み明け。私が子どもたちに提案したのはコルクボードやホワイトボードの縁に棉花で飾り付けていく作品でした。子どもたちから「いいね!」をもらい、作品作りが始まっていきました。



Hさんは、棉花の根に近い幹の部分根系をのぎりで切りとると、指でつまみながらじっと見つめて「固い、こんな風になってたんだ」とつぶやいていました。そして、樹皮に当たる部分を指で取り除くと、とてもすべすべしていて美しい木が現れました。Hさんと一緒に私も思わず「きれい…」とつぶやいてしまいました。Hさんは改めてその木を見つめながら笑顔を見せてくれました。こうしてまた、棉花と出合い直すHさんの姿を見られたことがとてもうれしかったです。

作品づくりが始まってしばらくすると、棉花だけでなく、コットンボールや綿も使って作品づくりを進める子たちも出てきました。

そんな中、Kさんの様子を見ると、「綿花の種」を貼り付けていました。種を使って作品を作ることは私の中で想定していませんでしたので、「種はどんなふうに使ってるの?」と声をかけてみると、Kさんは自分の作品について話し始めてくれました。



「これ『綿花』の成長なんだよ。ストーリー性をもたせてるんだ」

Kさんの作品をよく見ると、縁の「左下に種」が、「左中ほどに棉花」が、そして「左上にコットンボール」が飾り付けられていました。これまで綿花を育てた1年間の物語が作品の中で紡がれているのでした。Kさんの思いを聞いて、私は他の子にも「どうしてあなたはこうしたの?」と、一人一人にある思いを聞いてみたくになりました。

子どもたちが作品作りに一生懸命取り組んでいる姿を見て、改めてあの時子どもたちが声を上げてくれてよかったなと思いました。綿だけでなくその幹にも可能性を見いだす子どもたちに、私も学ばせてもらいました。



☆身近に感じてもらえる文章にする～信州ESDコンソーシアムへの参加～☆



今年度、6年1組は「信州ESDコンソーシアム」への参加と発表の機会をいただきました。「ESD (Education for Sustainable Development)」とは、「これから目指すべき持続可能な社会の創り手を育む教育」のことを言います。これまで、子どもたちは「信州ラウンドテーブル」や「善光寺びんずる市」に参加しながら、「耕作放棄地利活用プロジェクト」についてたくさんの方たちに知っていただく活動を続けてきました。そんな子どもたちが、今度は「ESD」の観点から

自分たちの活動を見つめ直し、発表をしていくことに挑戦をしました。

発表したい項目を7つに分け、グループに分かれて、発表原稿やそこで使うスライドを作っていました。発表の時間が限られていたので、子どもたちは、「何を伝えるべきなのか」ということを意識しながら、原稿やスライドに載せる写真や文字を決めだしていききました。

昨年度から「耕作放棄地の問題を多くの人に知ってほしい」という願いを持っていたMさんは、発表を終え、次のような振り返りを書きました。

まず、このESDで多くの人に耕作放棄地や綿花のことを知ってもらえてよかったです。今までの準備では、「耕作放棄地を身近に感じてもらえる文章にする」ことを心がけてきました。例えば、「自分の身近な人の土地も耕作放棄地になる可能性がある」という文です。ここには、『耕作放棄地を自分事として考えてほしい』という思いを込めました。実際に発表してみて、一般の方々のコメントの中には、「『耕作放棄地』という単語を初めて知りました」、という人もいました。この発表を通して少しでも多くの人に耕作放棄地を知ってくれれば嬉しいです。

調べた知識を頭の中に入れるだけではなく、これまでずっと行動し、自分にとっての耕作放棄地とは何かについて考えてきたMさんだからこそ、ただ耕作放棄地のことを知ってもらうのではなく、「身近に感じてもらいたい」という願いをもったのではないのでしょうか。発表すればたった数秒で終わってしまう言葉にも子どもたちのこれまでの経験や思いが込められているということに改めて気づくことができよかったです。

また、今回のESDでの発表を機に「耕作放棄地利活用プロジェクト」と「SDGs」のつながりが分かったことも私にとってうれしいことでした。子どもたちと話し合う中で、主にSDGs 17の目標の内、11、13、15へ貢献していることを子どもたちが意識するようになりました。これまでSDGsを意識したり、そのために活動をしたりしてきたわけではありませんでしたが、こうしてSDGsという視点から見た時、子どもたちが「耕作放棄地利活用プロジェクト」の新しい価値を発見することができたように感じます。



☆自分たちのつくった綿を使って☆

善光寺びんずる市での売り上げを何に使うのか話し合った結果、「自分の作りたいものの材料代にする」ということが決まりました。また、綿は、より使いやすいように、箱山ふとん店の箱山正一さんをお願いをして、専用の工場でカーダーしてもらうことになりました。カーダーされた綿に出合った子どもたちは、その綿の気持ちよさに思わず顔をうずめたくなるほどでした。箱山さんから、「その綿が、実際の布団に入れる状態の綿だよ」と教えていた



きました。私たちの畑から生まれた綿が、ここまで変化したのです。子どもたちはその綿の弾力を何度も確かめながら、自分の作りたいものを作り始めていきました。

G君、K君、R君は、それぞれ枕を作りました。綿を何度も布の中に詰め込みながら、頭をのせてその感触を味わう三人。綿を詰めるほどに、気持ちよさも増していくようでした。最後に三人が枕を並べて教室で寝るポーズをとってくれました。

卒業式の間際、私たちは最後に畑に行きました。「お借りしていた千野さんにきれいな状態で畑を返したい」と願う子どもたちと、最後まで責任をもって片付けるためでした。まだ残っていたマルチをゴミ袋に詰め、枝を学校に運びました。畑はきれいになりましたが、子どもたちには心残りがありました。それは、「この畑が、また耕作放棄地になってしまうのではないか」ということでした。中学校へ旅立つ私たちが、この先この土地を何とかするというのは現実的ではありません。しかし、子どもたちのこの畑での経験は消えるわけではありません。みんなで力を合わせて、この土地を利活用して綿花を育てられたという自信はいつまでも私たちの中に残ります。そして、その子にとっての「わたしの問い」をもち、追究をしていくことの良さを、みんなで学ぶことができました。「Think Globally, Act Locally」を大切に、私たちはこれからも歩み続けていきます。